

「人間の安全保障」 戦略

新世界事情

平和と開発のパラダイムシフトをめざし

吉田文彦



「人間の安全保障」

戦略

新世界事情

平和と開発のパラダイムシフトをめざして

吉田文彦



岩波書店

吉田文彦(よしだ・ふみひこ)

1955年生まれ、東京大学文学部卒。1980年に朝日新聞社入社、1984-85年に米国ジョージタウン大学 MSFS フェロー、89-92年にワシントン特派員、95-98年にブリュッセル支局長、2000年から論説委員、2001-02年に東京大学大学院新領域創成科学研究科講師(非常勤)。

主な著書は、『核解体』(岩波新書、1995年)、『証言・核抑止の世紀』(朝日選書、2000年)。

「人間の安全保障」戦略

〈新世界事情〉

2004年7月28日 第1刷発行

著者 よしだ ふみひこ
吉田文彦

発行者 山口昭男

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・法令印刷 カバー・半七印刷 製本・松岳社

©Fumihiko Yoshida 2004
ISBN 4-00-027031-1 Printed in Japan

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写は、日本複写権センター(03-3401-2382)の許諾を得てください。

はじめに	人間を第一に	1
------	--------	---

第一章	「人間の安全保障」とは何か	11
-----	---------------	----

1	冷戦後の世界の新たな脅威	12
---	--------------	----

2	「人間の安全保障」とは	15
---	-------------	----

3	「保護」と「能力強化」	21
---	-------------	----

4	国連の役割の再定義	27
---	-----------	----

第二章	「持続可能な開発」のゆくえ	31
-----	---------------	----

1	巨石文化はなぜ滅んだのか	32
---	--------------	----

——イースター島からの警鐘——

2	「持続可能な開発」戦略に向けて	40
---	-----------------	----

3	グローバルゼーション、新帝国主義と「持続可能な開発」	44
---	----------------------------	----

第三章	感染症との闘い	61
-----	---------	----

1	猛威をふるう感染症	62
---	-----------	----

2	立ち遅れる途上国の医療体制	66
---	---------------	----

——エイズ禍、マラリア禍——

3 新たな病原体の脅威 71

——エボラウイルスの宿主を追う——

4 ブレントラント元ノルウェー首相に聞く 82

第四章 「平和構築」の現場から……………93

1 コソボの悲劇 94

2 「平和構築」の現場を歩く 98

3 「平和構築」への試み 106

4 多国籍軍、人道介入をめぐる問題 117

第五章 「ソフトパワー同盟」を求めて……………125

1 カナダの外交戦略 126

2 カナダの「平和構築」政策 133

3 日本の「人間の安全保障」政策はどう進化してきたか 140

4 日本とカナダ、新しい同盟 146

おわりに 「ペトリ皿」の中の人間……………153

はじめに

人間を第一に

あれから、もう、一二年余りがたつ。

一九九二年六月——熱狂的なカーニバルで名高いブラジルのリオデジャネイロ郊外のリオセントロで、地球サミット（環境と開発に関する国連会議）が開催された。

乱伐される森林、不気味に広がる砂漠、次々に絶滅する野生生物、地表の生命を紫外線から守ってきたオゾン層の破壊、増え続ける燃料消費で気候温暖化が進む地球……。

満身創痍のようになってきたこの惑星で、人間が永く栄えていくには、国際社会が協調して対応策をとっていかねばならない。そんな問題意識から開かれた、歴史的な国連会議であった。

だが、世界中のメディアから脚光を浴びた大会議の陰には、人間社会が抱える厳しい現実が横たわっていた。

リオで、現地の人から気になる話を聞いた。

「いつもだと、この街のあちこちに、ストリートチルドレン（路上で生活する子供たち）がいる。でも、今は、ほとんど姿が見えないでしょう？　地球サミットを開催するのに、これではみっともないっていうので、どこかに追い出されたらしいんですよ」

ストリートチルドレンについて、同僚記者からは、こんな話も聞いた。

地球サミットの関連行事として、非政府組織（NGO）による「92グローバル・フォーラム」が開かれた。会場は、高い金網のフェンスで囲まれていた。中は、笑い声や、音楽、食べ物であふれ、環境保護を訴える声が飛び交った。

金網の向こうに目を向けると、ストリートチルドレンの瞳があった。フェンスの外側に出ると、少年たちが「水はいらないか、ジュースはいらないか」と集まってきた。彼らは、会場内で商売することを許されていなかった。そこで、今日、明日を食いつなぐために、会場から出てきた豊かな国の人々を取り囲んだのだ。

ストリートチルドレンと言っても、子供たちの事情はさまざまだ。親から捨てられて孤児になった子供たちもいる。家出をして、昼夜を問わず路上で過ごす子供たちもいる。親とスラムに住み、日中だけ街中に出てきて働き、夜は親元に戻る子供たちもいる。だが、いずれの場合も、義務教育もきちんと受けられず、個性や才能を活かす機会に恵まれない子供たちだ。

地球を守れ、自然を守れ、野生生物を守れ——確かに、どれも大切なことだ。地球が数々の激変を経て育んで来た自然環境は、人間生活の根底をなしている。水も空気も、土も緑も、地球が擁する稀有な自然環境の構成要素であり、それらなしには人間の文明も、文化も、生活も存立しえない。

だが、保護の一点張りでは、問題は解決しない。環境破壊の背景には、人間の過剰生産・過剰消費とともに、貧困による自然の収奪がある。先進諸国のぜいたく病と、開発途上国の貧困の両方に目を向けながら、対処法を模索しないと、解決の道にはつながらない。

日々の糧を得ることに精一杯な貧困層の人々、たとえばストリートチルドレンに、環境を守るためにリサイクル商品を使ってほしいと言ってみても、何の意味もない。電気のつく住いさえない彼らに、環境にやさしい太陽光発電や風力発電を勧める意見など、ナンセンスでしかない——地球サミットを取材しているうちに、そんな思いが膨らんでいった。

サミット会場では、そうした貧困層の現実とは別世界の、華々しい式典が行われていた。地球温暖化を防止するための気候変動枠組み条約や、野生の保護をはかる生物多様性条約の署名式が開かれ、各国の首脳たちが参加した。リオ宣言や行動計画も採択された。⁽¹⁾

歴史的な会議は、ひとまず成功だったのだろう。しかし、これで地球、自然、野生生物と人間の関係が大きく変わるのだろうか、との疑問をぬぐえなかった。

とくに、急速に環境破壊が進行し、今後の経済開発で一段と環境悪化が加速する恐れのある途上国で、どのようにすれば環境と開発が共存できるのかという問題は未解決のままに思えた。なかなか見つかからない答え。ずっと見つからないのではないか、という苛立ち。浮かない気持ちで、サミット会場から逗留先のホテルまで車で帰る途中のことだった。

夜の帳とばりの中に、文字が見え始めた。昼間の記憶からすると、そこはリオでも有数のファベララ(スラム街)がある丘だった。

近づくにつれて、英語の文字がくっきりと浮かび上がった。

「人間を第一に」(human first)

電球をつなぎ合わせて、大きな文字をつくり、幹線道路を走る人たちに訴えていたのだった。地球だ、自然だ、野生だと言う前に、ここの窮状を何とかしてくれという、悲痛な叫びが、電球文字にたくされていた。

じっと眺めているうちに、ひとつの糸口が見えたような気がした。

環境問題を起こすのも、環境破壊でしっぺ返しを食らうのも人間である。人間個人、人間社会が変わらないと、環境問題も解決しない。ストリートチルドレンやスラムを置き去りにする社会的矛盾に切り込まないのでは、環境保全も空念仏に終わりがかねない。

やはり、根本は人間の問題であり、人間が加害者でも被害者でもある。人間個人、人間社会が変わり、変わるような政策の積み重ねこそが、たとえ地味であっても、問題に対処する鍵になる。

取材で疲れた頭の中で、そんな思いが渦巻いた。

- ・ 経済の安全保障（貧困からの自由）
- ・ 食糧の安全保障（飢餓からの自由）
- ・ 健康面の安全保障（病気からの自由）
- ・ 環境の安全保障（清潔な水と空気の確保など）
- ・ 個人の安全保障（暴力、犯罪、薬物の恐怖からの自由）
- ・ 地域社会の安全保障（家族生活、それぞれの民族集団に参加する自由）
- ・ 政治の安全保障（基本的人権を享受する自由）

なるほど——いずれの安全保障も、「個人が人間としての能力を最大限に高め、経済・社会・文化・政治などすべての領域で能力を十分に発揮」するために、ぜひとも達成したいことばかりである。ここに示された「人間の安全保障」は、地球サミットが主要テーマにした環境と開発という枠組みを超えて、政治や民族問題までも視野に入れたものだった。

このUNDP報告書を読んだ時、リオで地球文字を見た際の思いがよみがえった。

根本は人間の問題であり、人間が加害者でも被害者でもある。人間個人、人間社会が変わり、変わるような政策の積み重ねこそが、たとえ地味であっても、問題に対処する鍵になる——

との思いだ。

リオでは、UNDPの開発問題の専門家たちとも会った。ひょっとして彼らも、道すがら、電球文字を見ていたのだろうか。ふと、そんな思いに駆られたりもした。

UNDP報告書は、環境の安全保障にせよ、経済の安全保障にせよ、それ自体を目的としていない。あくまで「人間の安全保障」を確保するための、個々の政策領域と位置づけている。そこには、「人間開発」を通じて、人間個人、人間社会、しいては人間の文明のあり方を変えていこうという思いがこもる。その着想の肌ざわりには、電球文字を見た時の感覚と似たところがあった。

振り返ってみると、冷戦後の世界では国家間の紛争よりはむしろ、環境破壊や貧困、内戦や民族対立、テロ、疫病などが多くの人々に脅威を与えるようになった。軍事力を主たる手段にして国家主権や国民の生命・財産を守る国家安全保障だけでは、これらの新しい脅威には対応し切れないのが現実だ。

だからこそ、である。生身の人間に焦点を当てた安全保障を実践することが、人間を変え、社会を変え、時代を動かす力となりうる。

本書は、そんな「人間の安全保障」に関するものである。

「人間の安全保障」という新興の概念が、二一世紀における国際社会の規範となるのかどうか。それはまだ不透明だが、「人間の安全保障」が、新たな開発と平和のパラダイムを希求していることは間違いない。

「人間の安全保障」に関する政策は間口が広く、中身も多様である。そのすべてを網羅することはできないので、本書では概ね次のような構成で、「人間の安全保障」の個別政策に分け入ってみることにする。

まず、「人間の安全保障」が台頭してきた沿革を概括する。具体論ではまず、環境の安全保障、経済の安全保障、食糧の安全保障が密接に絡み合う「持続可能な開発」をとりあげ、次に、国境を越えた感染症の広がりを受けて関心の高まっている健康面の安全保障について考える。そのうえで、個人の安全保障、地域の安全保障、政治の安全保障と深い関わりを持つ「平和構築」について記し、最後に、「人間の安全保障」で主導的役割を果たす、カナダと日本の取り組みを紹介して、戦略的な見地から、「人間の安全保障」をめぐるソフトパワー同盟について考察することにする。

本書における登場人物の肩書きは原則として、インタビュー当時のものを使っている。出典については、インターネットで読むことができる分については、できるだけURLを記載する

ことにした。「人間の安全保障」という考え方については、カナダのロイド・アクスワージー元外相、ノルウェーのグロ・ブルントラント元首相、日本国際交流センターの山本正理理事長、国際協力機構(JICA)の鈴木規子氏から、多くを学ばせていただいた。出版に当たっては、辛抱強く原稿を待っていただいた岩波書店の馬場公彦、伊藤耕太郎両氏のご尽力に負うところが大きい。この場を借りて感謝申し上げます。

(1) 地球サミットに関する文書は、<http://www.un.org/esa/sustdev/index.html>に掲載。

(2) 「人間開発報告書」の一九九四年版は、<http://hdr.undp.org/reports/global/1994/en/>に掲載。

第二章

「人間の安全保障」とは何か

1 冷戦後の世界の新たな脅威

宇宙進化の壮大な物語を描いた『コスモス』など、数々の好著を残した故カール・セーガン博士は、核軍縮を訴えたことでも知られている。

生前、米国コーネル大学のそばにあった自宅を訪ねたのは、冬の寒い日のことだった。外は、一面の雪景色だった。博士は快く私を迎え入れ、天井の高い居間に通してくれた。

博士に尋ねた。

「冷戦時代とは、たとえて言えばどんな時代だったと思いますか」

答えはこうだった。

「ビンの中に、毒針を持った二匹のサソリが入っている状態を想像してみればいい。サソリは互いににらみ合い、相手を刺して、自分だけ生き残ろうとする。だが、一方が刺せば、必ず他方も刺して来る。戦いは双方の死を意味するのです。」

核兵器で武装した米ソの両陣営がにらみ合った冷戦も、同様な状態でした。核戦争が始まれ